
東京工業大学特集

物性研究所特集

東京工業大学特集

(まえがき)

理学部物理学科，応物学科の物性関係の研究室及び工学部の中で物性研究者に興味のありそうな研究室のいくつかをピックアップして執筆を依頼した。理学部物理学科及び応物学科の総括的な報告はそれぞれ市村浩先生，岡田利弘先生にお願いした。

〔理学部物理学教室〕

理学部物理学教室の物性物理

先ず東工大物性物理グループの歴史から始めよう。終戦直後，当時の和田小六学長の英断に基づいて，学内措置として応用物理学コースの設置が決まり，昭和23年頃までに，高木豊，原島鮮，三宅静雄の三教授が相次いで招聘されたのが，我が物性物理グループの誕生と云えよう。それまで，工学部の共通科目としての物理学担当として孤墨を守っていた大石二郎教授と，これら三教授が中心となって，近代的な物理学教室の建設が急速に進められ，其後増設された素粒子，原子核関係の講座と合せて，7講座の物理学科が完成したのである。

(大学が新制度に切替えられるときに，工学部は理工学部と変った。)しかしこの建設は，現在各所で行われているような正式の学科増設という形で始められたものでなく，工科系の学科の定員を流用する形で行われたので，色々困難があったらしい。人員の充実は極めて急速に進んでも，研究室の面積，設備の拡充が追いつかず，その点ではいまだに建設の途上にあると云うべきかも知れない。現在われわれが物理教室と呼んでいるものの定員は7講座に他の部局からの融通1講座を加えた8講座と，一般教育の学科目としての3名(46年度より4名となる予定)とを合せて，教授助教授合計19名であり，そのうち物性物理関係は10名である。

誕生より約10年間，上記4教授を中心とする時代がつづいたが，昭和30

年代の始め頃、これまた短期間のうちに、三宅教授は物性研へ、原島教授は I. C. U へ、高木教授は原子力研へ転出するという事態が起り、あらぬうわさが立つと云うようなこともあった。その後大石教授も本学に新設された応用物理学の中心として転出したので、現在はいわば第二期に入っているわけである。

一昨年、原島教授が I. C. U に去ったあと物性理論の中心であった、故新楽和夫名誉教授が他界されるという不幸な事件が起り、それ以前から内定していた田辺行人助教授（現東大教授）の転出とによって、理論関係は半減という状態になったが、幸い昨年 10 月より小口武彦教授が着任し、物性物理学第二講座の再建が力強く始まっている。

研究室の編成は、本学では教授・助教授毎に独立な 1 研究室という建前であるが、講座毎のまとまりも併用されている。各研究室の詳しい紹介はそれぞれの執筆者に譲り、物性関係の研究室一覧を作れば、つぎのようになる。ただし専門分野は筆者が適宜書いたものであることをお断りしておく。

物性物理学第一講座	市村 浩, 三宅 哲	(理論)	統計物理, 固体物理
" 第二 "	小口武彦, 欠 員	(理論)	磁性, 統計物理
" 第三 "	沢田正三, 浜野勝美	(実験)	強誘電体, 固体物理
" 第四 "	本庄五郎, 高木ミエ	(実験)	結晶物理
物 理 学	野沢豊吉	(理論)	プラズマ物理
一般教育物理学	柳 武敏	(実験)	強誘電体

ここで念のため申しておきたいことは、上記のように定員の区分は色々あるが、本務の違いによる僅かの差は別として、研究面では勿論、予算其他、大学院担当の点など一切区別が無く、平等であることが、大学全体として確立されていることである。

先にも一寸と触れたように、当物理教室はその誕生のし方が少し変わっている。で、共通的な設備其他不十分な点が多く、研究室の面積なども基準の 70% 以下という有様で、各研究室とも手狭の不便さに困っている。しかし何とやらの法則の裏がえしというか、上記各研究室の活動は益々盛んになるうとしている。殊に 42 年理工学部から理学部工学部となって以来、新しい出発が有形無形の色々な面で始まっているということができよう。(市村 浩)